けい☆おん

柊こなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けい☆おん

【Ｎコード】
Ｎ７１３３Ｓ

【作者名】
柊こなた

【あらすじ】
それは、突然だった。ある日私が眠りから目覚めると股のとこに女の子にはないものがあった。「けいおん！」のガールズラブな話になっています。この「けい☆おん」は、にしすけさんが製作した「かが☆こな」を元に製作しました。作者のにしすけさんには、許諾を頂いております。

思い

私の名前は、中野梓。私は、生まれた初めて『恋』という感情を抱いた、生まれて初めてのことだった。その相手は、私が入った軽音楽部の先輩だった。入部した時、私はその場の空気に溶け込まずにいた。練習もろくにせずにいつもお茶を飲んだりお菓子を食べたりしてただグータラと過ごしている先輩達、それに便乗している先生。そんな部を私は受け入れられずにいた。本当にこの部に入って大丈夫なんだろうかと毎日思っていた。

でも、だんだんと、その空気になれてきて私はその場の空気に溶け込むようになった。そして、一番仲良くなったのは、唯先輩だった。唯先輩とは、部室で話したり部活の帰りに一緒に帰ったり、冬に一緒に鍋したり商店街の演芸大会で一緒に出て演奏したりして、一番仲良くなった。そしてある日突然、私は気付いた。

「私、唯先輩のことが好きになってる……」

いつも私の頭の中ではその子の顔が浮かんでいた、授業を受けているときやお風呂に入っているとき、ご飯を食べているときなど何をしていてもいつもその子を思ってしまう。そしていつしか、その子に自分の思いを伝えたいという思いが芽生えたのだが、その思いは伝えらないのであった。なぜなら、そこにたどり着くまでには絶対に乗り越えられないものすごい大きな壁があるのであった。それは、その子が私と同じ女の子だった。そう私は、同性に恋してしまった。

「あーずにゃんっ！」

「うわ！」

私がギターをソファーの上に置いたとき私に抱き付いてきた。

「どうしたんですか、唯先輩？」

「いやぁ、だたなんとなく」

「なんとなくって」

「ねぇ、あずにゃん？どう、けいおん部に入って？」

「えっと……楽しいですよ、唯先輩！」
私は、自分が今思っていることは違うことを言った。
「よかった、なんか最近、あずにゃん暗い顔をしてたから心配しちゃったよ」
唯先輩は、心配そうな顔をして言った。
「大丈夫ですよ、唯先輩。少し、考えことをしていただけですから」
「そう、ならいいけど。なんか悩み事があったら、いつでも私に相談してね。相談に乗るから」
「ありがとうございます」
と私が言った後、唯先輩は笑って律先輩のところに行った。

私は、この思いを唯先輩に伝えたいと思っていた、でもこの思いは永遠にその子に伝えらないと思った。その時、私は思った。
「どうして私は女の子として、この世の生まれてきたんだろう。どうして男の子として、この世に生れてこなかったんだろう」
と思った。私は、初めて自分のことが嫌いになった。そんなこと思っていたら、いつしか私はこんな思いが芽生えた。
「男になってみたい」
という思いが芽生えた、この世に神様がいたらひょっこりと私の目の前に現れて私のこの思いを叶えてくれないかなと思った。でも私はこの時、まさかこの永遠に叶う事が出来ない思いがあとであんな結果で表れるなんてまったく思っていなかった。

思い（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。今回、二作品目のガールズラブの作品になっています。駄作ですけど、よろしくお願いします。

突然

それは、ある日突然だった。
「なんじゃこりゃぁーーーーー！！」
私は、眠りから目が覚めて数秒で奇声を上げた。
「どうしたの梓、そんな大声出して」
お母さんが、私の部屋のドアの前に来て私に聞いてきた。
「い、いや何でもないよ、お母さん」
「本当に？ちょっと入るわよ」
と言うとお母さんは、ドアノブに手をかけドアを開けようとした。
「本当になにもないから。お母さん、さっきお父さんが呼んでいたよ」
私は、とっさに嘘をついた。
「本当？一体何かしら」
と言ってお母さんは、ドアの所からはな一階に降りていった。
「……危なかった」
なんとか、お母さんを追い払った。まさか、こんなことになっている自分の姿を見せてはいけなかった。
私は、自分の目を疑った。今、自分の股のところが膨らんでいたのであった。
「ま、まさかね。これは夢よ。もう一回寝たら覚めるわきっと」
と言いながら私は、もう一回ベットに横になり寝た。だが、再び起きても股のところは膨らんでいた。
「う、うそでしょう……ぁ！きっとなにかが入っていて膨らんでいるのよ」
そう思いながら私は、パジャマと下着を一緒にごそっと降ろしてみた。
「……そ、そんな、そんなことが」
私は泡を吹いて気絶しそうだった。股のところには本来なら女の子

には絶対に存在しないものが、最初からあったような存在感を出しながらちょこんとついていた。
「どうして、そんなものが……」
もう私は言葉を失った。今、自分の身に起きていることに。突然、眠りから目覚めたら自分の股のところに本来なら女の子には絶対につかないものがそこに着いているのだ。未だに状況が飲み込めずに、口を大きくポカンと開けて立っていると
「梓、そろそろご飯食べないと学校に遅刻するわよ」
とお母さんが言ってきた。その声のおかげで、私は正気に戻った。
「うん、分かった。すぐ行く」
降ろした下着を再び履き、パジャマを脱ぎ制服に着替えてカバンとギターケースを持って一階に降りていき、朝食を食べて学校に行ったのであった。

突然（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

先輩

朝、私の身に起きた怪奇現象の事を考えながら私は学校に向った。そして、学校に着き私はギターを軽音部の部室に置き、教室に向った。教室に着き、かばんを机の横にかけると私の友人の憂がやってきた。

「おはよう、あずさちゃん」

「ぁ、おはよう」

「どうしたの、あずさちゃん？今日は元気がないね」

「うん、ちょっとね」

そりゃそうだ、朝のことを思い出すだけでゾッとする。

「もしかして、頭痛いの？」

「いや、大丈夫だよ」

と私は苦笑いをしながら言った。

「そう、だったらいいけど」

「心配してくれありがとね」

そう言った瞬間、チャイムが鳴り憂は自分の席へと戻っていた。

そして、時間は流れ放課後になった。本当は、今日は部室へは行きたくなったがこのまま家に帰っても解決策は見つからないと思ったから、私は部室へと向かった。そして、部室のドアの前に来て一回深呼吸し中に入った。

「こんにちは」

「あ、あずにゃん。会いたかったよ～」

と唯先輩が抱き付いてきた。

「ちょっ、やめてくださいよ」

と顔を真っ赤にしながら言い私は、唯先輩を無理やり離し私は周りをキョロキョロと見渡した。見渡す限り、部室には唯先輩しかいなかった。

「今日は、唯先輩だけですか？」

「うん、今日はりっちゃんも澪ちゃんも家庭科の課題やっているし、むぎちゃんは家の用事があるって言って帰ったよ」
「そうなんですか」
そう言いながら私は、荷物を机の上に置き古い木材でできた椅子に座った。そして唯先輩も、私の反対側に座った。
「……」
わたしは黙って下を見ていた。あのことを唯先輩に相談してみようかなと思った。でも、今ここで唯先輩に自分の股の所に本来、女の子にはないものがあるって言ったら完全に嫌われるしそれに言うのが恥ずかしい。
「あずにゃんどうしたの？なんか悩み事でもあるの？」
唯先輩が、私の顔を覗き込むように見てきた。
「……あの、唯先輩。ちょっと、相談があるのですがいいですか？」
「めずらしいね、あずにゃんが私に相談もちかけるなんて」
とニコニコ笑いながら言った。
「で、相談ってなに？」
「あの……実は、その……」
私は顔をリンゴのように真っ赤にして、聞こえそうで聞こえそうじゃない声で言った。
「生えちゃったんです」
「え？なにが？」
「ここに」
と言うと私は、迷いながら自分の股のところを指差した。
「え！うっそ！……」
唯先輩は、くちをポッカンと口を開けてただ呆然と立っていた。誰だってこんなことを突然、聞かされたらこんな状態になるだろうと思っていた。
「あのう、唯先輩？大丈夫ですか？」
「あ、あずにゃん、それいつから生えていたの？」
体中を震わせながら聞いてきた。

「朝起きたら、生えていたんです」
「し、信じられない。ま、まさかそんなことが」
「本当なんです、信じてください」
真っ赤になっている顔を横に向けて、唯先輩に言った。
「あずにゃんが、嘘つくなんて考えられないしね。でも、どうして
そんなものが急に」
私は安心した。どうやら、唯先輩は私はの事を信じてくれたらしい。
「それが、まったく分かりません。変なものも食べてないし」
「本当に、どうしてだろうね」
とさっきまで慌てていた顔をしていた唯先輩は、冷静な顔にいた。
「ねぇ、あずにゃん」
「なんですか？」
「それって、感触あるの？」
「はい、一応朝、確かめてみたらもう完全に私の身体の一部になっ
ているみたいで」
「へぇ、そうなんだ」
といつもとは違う顔つきをして、言った。

先輩（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

対策

唯先輩は、まじめな顔をして考え込んでいた。
「う～ん、ねぇあずにゃん」
「なんですか、唯先輩？」
「病院とか行ったの？」
「いや、さすがに抵抗があるしそれになんて説明したらいいか分からないし」
「そうだよね、朝起きたら生えていましたって言いづらし簡単に信じてもらえないだろうし」
「そうですよね。でも、本当にどうしよう……」
と私がうつむいて言うと、唯先輩が
「……ねぇ、あずにゃん」
「はい、なんですか？」
「他に、なんか変わったこととかないの？」
とまじめな顔つきをして言った。
「いえ、特に変わったことはないです。あれ以外は……」
「そっか、まぁとりあえずお菓子でも食べようか」
そう言うと、唯先輩はカバンからお菓子を取りだした。
「むぎちゃんに、もらって来たんだよねぇ」
と言いながら、むぎ先輩からもらったお菓子を一口食べた。
「ほら、あずにゃんも」
唯先輩は袋からお菓子を取りだして、私の口の近くまで持ってきた。
「もう唯先輩、お菓子を食べている場合じゃなんですよ」
と私は、呆れた顔をして言った。
「ほらよく言うじゃん、『腹が減っては戦は出来ぬ』って」
「まぁ、そうですけど……」
「ほら、おしいから食べて」
「それじゃ、いただきます」

そう言った後、唯先輩がくれたお菓子を食べた。
「こんにちは」
と私がお菓子を食べているとき、ドアの方から見知った声が聞こえた。
「ぁ、澪ちゃん。やっときた」
唯先輩が、ニコニコと笑いながら言った。
「あれ澪先輩、律先輩は？一緒じゃなかったんですか」
「あぁ、律ならまだ家庭科の課題をまだやっているよ。たぶん、あの分だと今日は部室に来るのは無理だと思う」
澪先輩は、椅子に座りながら言った。
「そうなんですか」
私がそう言うと澪先輩も唯先輩からお菓子を貰って、三人でお菓子を食べながらしゃべっていたら時間はとっくに下校時間を過ぎていて、今日の軽音部は解散となったのであった。結局今日は、なにも解決策が見つからずに自宅に帰宅したのであった。

対策（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、未定です。

授業

結局昨日は、何も解決策が見つからないまま過ぎていったのであった。昨日は家に帰って私は、お風呂にも入らずに自分の部屋にいた。あれを見るのが嫌だったしあれが生えた自分の姿を見るのが嫌だった。明日になればきれいさっぱりなくなっているだろうという希望を持って、私は眠りについた。

そして翌日の朝、私は頭の上でうるさく鳴り響く目覚まし時計を止め起きた。そして、起きてすぐ股の辺りを息をのみながらゆっくりと触るとあれは堂々とあった。

「……はぁ、消えてなかった」

私は溜息をついて言った。私の希望は消え去ったのであった。

股の間の違和感を感じながら、私は学校に登校した。そして、朝のホームルームを終えて一時限目の数学の授業を受けていた。

「梓ちゃん」

後ろの席にいた憂が私の肩をポンと叩いた。

「どうしたの、憂？」

「さっきから、足が振るえているけど大丈夫？」

しまった、股のことを考えていたら勝手に足が振るえていた。

「大丈夫だよ、心配ないから」

「そう、ならいいけど」

「心配掛けて、悪かったね」

と苦笑いしながら言い、私は前を向き机に肘をついて

「はぁ」

溜息をついた。私は何とかしてこの股の間にある違和感を消すために太腿をこすり合わせて足をもぞもぞと動かしたが、違和感は消えなかった。太腿をこすり合わせている間、周りから変な目で見られているような気がした。

「中野さん」

「あ、はい！」
突然、先生に自分の名前を呼ばれたから私は反射的に返事をした。
「この、問題分かるか？」
と先生が、黒板に書いていた数式を指差して言う。
「……分かりません」
「そうですか、それじゃ平沢さん。分かるか？」
「はい」
「それじゃ、前に出て答えを書いてください」
と先生が言うと、憂は席を立って黒板のところに行き答えの数式を書いて自分の席に戻った。
「正解です、ここは次の期末テストに出るから覚えておくように」
今の私には、覚えることができなかった。なんとかして、この違和感を消すために必死に考えていた。頭を抱えてもシャーペンを回しても結局は、なにも思いつかない。
「梓ちゃん」
再び、憂が声を私にかける。
「なに」
返事をしながら、後ろを向く。
「梓ちゃん、本当に大丈夫？さっきの問題、梓ちゃんだったら解ける問題だったのに」
「大丈夫よ、ちょっと考え事をしていただけだから」
と手を振りながら言った、さすがに友人といってもこの前代未聞のことを言えるはずがなかったし周りにも人もいるしそれに言うのが、恥ずかしい。
「そう、何かあったらいつでも言ってね」
「うん、ありがとね」
と言って、私は前を向いた。私は、周りをきょろきょろと見渡した、気分の問題かは分からないが、周りにいる女子が異性に見えて男子が同性にみえてしまう。あれが生えてから、私の目に見えている世界が崩壊しているような気がした。そんなことを考えていると一時

限目の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

授業（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

トイレ

一時限目の授業が終わった後、私は上級生の教室へ行き唯先輩を呼び出した。呼び出した後、私と唯先輩は誰も入らないような空気を漂わせているトイレへやってきた。

「あずにゃん、別にここじゃなくても……」

「すみません、誰にも聞かれたくないんで」

この状況を、唯先輩以外の人に聞かれたくない。

「それであずにゃん、あれ、どうなった？」

唯先輩が、あれについて質問する。

「……まったく変わらずです」

正直に質問に答える。

「そっか、消えてないのか」

「はい……あのう、唯先輩」

「なに、あずにゃん？」

「ちょっと、トイレしたいんで見張っていてくれませんか？」

「うん、分かった」

そう言って唯先輩は、その場から立ち去り私は個室に入った。

「どっちの方から出るんだろう……？」

私は疑問に思っていた。疑問に思っていることは、いつものところから出るのかそれとも新しく生えてきた方から出るか私は疑問に思っていた。

「……大丈夫かな……」

と少し怖気づいていた、でも私は目前に迫ったこの問題に全力を注がなければ解決しないと思い私はスカートのチャックを下げて、下着と一緒に下ろす。

「……」

当然のように、私のあそこには昨日の朝突然と生えていたものがちょこんと生えていた。目を何度もこすってもこれは現実で起こって

いることなのだ。私が小さい頃に、お父さんと一緒にお風呂に入っていた頃を除いて私はまだ実物を見たことがなかった。そして私は、何を考えていたかは分からないがそれに触ったのであった。
「うわ……」
先の方をちょんと触ってみると予想以上にぷにぷにとしていた、これがある条件を満たせばこれの何倍の大きさになってそして硬くなるっていう話を保健の授業で聞いたことがあるけどと思っていた時ドアの向こうから
「あずにゃん、まだ～」
不意に唯先輩の声が聞こえた。
「もうちょっと、待ってください」
意を決し、私は洋式の便器にしゃがみ込んで下半身に思いっきり力を込めた瞬間、水が流れる音がした。
「うっわ、出てきた」
予想はしていたが、まさか本当に出てくるとは思わなかった。どうやら老廃物を排出する機能としては男性器の方しか機能しておらず、いつもの方からは出てくる気配がなかったどうやら完全に機能は失われているようだ。ものすごく、へんな感じがした。そして、老廃物の排水は終わり私が便器から立ち上がりスカートを戻した。スカートを戻した後、一旦深呼吸をしてから外に出た。
「終わった？」
唯先輩が、心配そうな顔をして言う。
「はい、終わりましたよ」
と言った瞬間、チャイムが鳴った。
「やばい、授業に遅れる～」
と言いながら、唯先輩は走ってトイレから出ていった。そのあとに続くように私もトイレから出て教室に戻った。

トイレ（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

体育

三時限目の授業が終わり、私は体育館の脇にある更衣室で体操服に着替えていた。上はありふれた白の体操服で下は、現在では貴重品となっている紺色のブルマ。もう、この学校以外でブルマ使っている学校なんてないだろう。

「よし、着替え終わりと」

ちなみに、私の身体から生えてきた例のものはもっこりとしないように股の下にきっちりと格納した。

「なぁ、梓」

と後ろからに純が声をかけてきたから私は後ろを振り向く。

「なに？」

「最近、お昼はずっと軽音部の部室で済ませているけどさ。今日くらいは、一緒に食べよう？たまにはいいでしょう」

と言うと、純は後ろからギュッと私に抱きつく。

「ちょっと、暑いから離れてよ」

「いいんじゃん、たまにはさ」

背中には柔らかい二つの膨らみが、純が身体を動かすたびにその感触が伝わってくる。隔てるものが薄い生地でできた体操服二枚分、あと彼女がつけているいるであろうブラのみであろう。それが、私の背中にやや大きめのサイズの胸が当たっている。

「……」

私は、顔を真っ赤に染めてさらに心臓がドクドクと騒がしく鳴っている。

「まさか、これって……」

私は思った、男性のものを備えてしまった女の子は、性欲が異性ではなく同性に向くようになる。つまり、女の身体でありながら女の子の身体に興奮するようになるという事だ。つまり

「純、ちょっと離れて」

「どうしたの、梓？」
「とにかく、今すぐに離れてよ！」
「なんだ、恥ずかしいのか。梓」
私の事情を知らない彼女としては、これは軽い遊びのつもりでやっているんだろうが今の私には、この遊びは禁じた遊びなのだ。背中にくっついていた純を強引に引き剥がし両足を揃えて折り、膝を抱えるような格好でその場にしゃがみこんだ。
「どうした梓、お腹でも痛いの？」
「……」
「おーい梓、返事しろ～」
今、私の致命的なことを言えばブルマ姿でいることである。もし例のあれが、『スパーマ●オ』で出てくるマリオがキノコを食べてでかくなるようなことになると身体のラインがはっきりと浮かぶ衣類だとそれが……目立ってしまう。スカートを履いてやり過ごそうとしたいものの、私の着替えは数メートル先にある。
「梓ちゃん、大丈夫？」
憂が私に声をかけてきた。あろうことが着替えの真っ最中の彼女は上下揃って下着のみという格好でいた。しかも前屈みの状態で、ピンク色のブラからちらりと覗くふっくらと膨らんだ胸が形成する谷間が私の目の前に見えた。全身が溶けそうなくらい熱い、頭がふらつき意識が保てない。そして
「……ダラダラ……」
私の鼻から、真っ赤な液体が大量に流れてきた。そして私は、気を失い鼻血をダラダラと流してその場に倒れた。

体育（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、分かりません。

6月28日にブログで、「二次小説発表会（夏）」をやりたいと思います。「二次小説発表会」は簡単にいえば、報告会みたいなものです。

ブログのＵＲＬは←

二次小説の館←

ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｓａｋａｇｉｎｎｔｏｋｉ／

二次小説の屋敷←

ｈｔｔｐ：／／ｓａｋａｔａｇｉｎｔｏｋｉ．ｂｌｏｇ．ｓｏ－ｎｅｔ．ｎｅ．ｊｐ／

目覚め

私は、更衣室で鼻血を吹いて気絶をした。
「……ここは？」
目が覚めた時は、私は体操着のままベットの上で寝かされていた。
「意識が戻ったみたいですね」
私の顔を覗き込んできたのは、見覚えがある養護の先生だった。
養護の先生がいるってということは、ここは保健室だと思った。
「先生、私……どうして保健室に？」
「体育の着替えの時に、鼻血を吹いてそのままばたりと倒れたそうですよ」
先生の話を聞くと、憂と純がここまで運んでくれたらしい。鼻血は止まっているが、しばらく安静にしていればいいとのことらしい。
「それにしても中野さん、どうしたんですか？更衣室を血の海に変える量だったそうですが」
と書類に書きながら、聞く。
「……えっと、どうしてでしょうかねぇ……私にもさっぱり」
まさか、同性に興奮して鼻血を吹いたって言えない。
「先生、その運んでくれた二人私になにか言ってませんでしたか？」
私がそう聞くと、先生は手を止めて
「何かですか？そうですね、かなりあなたのことを心配した様子でしたけど、それがなにか」
「いえ、何でもないです」
と言って私は、仰向けになって天井を見た。先生の話から推測すると、あの二人は私のあれには気づいていいないだろうと思った。
「身体の具合どう？頭がくらくらするとか、だるいとか」
先生が、私の体の調子を聞いてきた。
「いえ、もう大丈夫だと思います」
「そうですか、でも念のためにもうしばらくここで横になっていて

くださいね」
「分かりました」
「ちょっと、先生職員室に行かないといけないから。すぐに戻るのでちょっとだけ待っていてくださいね？」
そう言い残し、先生は椅子から立ち上がりさっきまで書いていた書類を持って保健室から出ていった。

目覚め（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

保健室「上」

保健室から先生が出ていった後、私は真っ先に自分の股間をチェックした。股間を見てみるとあれはいつの間にか元のサイズに戻っていた。

「……よかった」

と小声で呟いて私は時計を見た。時計を見ると、午後1時を少し過ぎていた。４時限目の授業が終わってお昼休みになっている時間だった。

「……」

私は考えた、どうして鼻血を吹いて倒れたか。そして考えた結果ある仮説が出来た、今の私の体はこの特殊な器官を備えている間は、男の子と同等だという事だ。女の子の着替えを覗き見るというのは、男としてはたまらんシチュエーションなんだろうなと思う。つまり、今私は、女でありながら他の女の子の身体に興奮してしまう身体になってきているんだろうと思った。

「はぁ……もう一度寝ようかな」

と溜息をついて一度寝ようとした時、保健室のドアが開き

「あずにゃん、大丈夫？」

と聞こえてきた。

「唯先輩ですか？」

唯先輩が保健室に入ってきて、私が寝ているベットの近くにあった椅子を持ってきてベットのところに置いて椅子に座った。

「あずにゃん、大丈夫？　さっき憂から聞いたんだけど、着替えの時に鼻血吹いて倒れたんだって？　大丈夫なの？」

「はい、もう大丈夫ですよ」

「どうしたの？　今日、そんなに体調悪かった？」

鼻血を吹いて倒れた原因は分かっているが、それを唯先輩に言ったら今まで築いてきた好感度が大幅に下がってしまうと思ったから

私は
「さぁ、どうしてでしょうね……はっはっは」
ここは適当に、誤魔化しておくしかない。
「話を聞いて何事かと思ったけど、元気そうで何よりだよ」
そう言って唯先輩は、自分が座っていた椅子から立って私がいるベットの端に腰をおろした。唯先輩の安堵に満ちた横顔を見ていると本気で私の事を心配してくれたのが良く分かった。
「ねぇ、唯先輩？」
「……ん？　なあに？」
「もしも治らなかったら、どうしよう？　そもそも、これが生えてきた理由なんてどこにも無いのよ、ある日突然ですよ。今更だけど、それがちょっと怖いんです……次は、どんな異変が起きるんだろうって思うと私……」
こんな状態で女として生きていけない、それはさっきの一件で身を投じて思い知った。今後の事を考えると不安な要素なんて探せばいくらでも見つかるんだろう。
「そう不安にならなくてもいいって、あずにゃん。そのうち対処法も見つかるはずだからさ」
唯先輩の返答は、私の弱音を気を遣わせてしまったのか妙に明るいものだった。
「……うん、それもそうですね」
「それにほら、もしあずにゃんがずっとこのままだったら私がずっとそばにいるから」
「唯先輩……」
そう私が言うと、唯先輩は正面から私に抱きついてきた。

保健室「上」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

保健室「下」

今私は、ベットの上で唯先輩が抱き付いてきた、馬乗りになるような格好だった。唯先輩のしなやかな腕、ほっそりとした太腿が私の体にぎゅうぎゅうと押しつけられる。純とは違って、唯先輩の胸はぺったんこだった。

「……」

「……」

お互いの吐息が感じられるくらいに迫った顔、抱き合ったまま二人は固まっていた。

「……唯先輩？」

今、私のあれがいつもの大きさより倍増して唯先輩の魅惑の渓谷に押しつける格好だった。

「なあに、あずにゃん？」

と唯先輩はくすくすと笑いながら言った。

「あのう、これってどういう事なんですか？」

「嫌なの、あずにゃん」

唯先輩はいつもニヤついた笑みはなくそこにはあるのは表情の消え失せた顔だった。なにを考えていか全く分からない、見たことのない怖いくらいの無表情だった。

「い、嫌じゃないですよ。ただ……」

「ただ？」

「その……あの……」

嫌じゃないけど、どう言ったらいいか分からない。

「あずにゃん」

そう言うと唯先輩は、ギュッと私を抱きしめた。

「唯先輩？」

「……」

私の問いかけには何も答えず。ただ私の体を抱きしめていた。

「あずにゃんが、倒れたって聞いた時本当に心配したんだよ。もし、あずにゃんの身に何かあったら私、どうしたらいいか」
唯先輩は、目から涙をこぼしそうな顔をして言う。
「唯先輩」
それからずっと私と唯先輩は抱き合い、しばらく経ってから唯先輩がゆっくりと私の身体を離してベットから降りた。
「じゃそろそろ行くね。次の授業、私たちは移動教室だから」
そう言い残すと、唯先輩は振り向くことなく保健室から出ていった。
私はたった今、初めて唯先輩のいつもとは違う「女の顔」を見た。いつもの唯先輩だったら絶対に見えない、異性にしか見せない女の子らしい表情だった、もしこれが生えなければ一生見ることができない唯先輩の素顔だった。

保健室「下」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

帰宅

あれから時が流れ放課後、私は放課後になるまで仮病を使って保健室に居座っていた。授業を受ける気がなかったからである。そして今日の放課後はテスト週間のため軽音部の練習がなかったので、いざ、家に帰って勉強しようと思いながら靴箱から靴を取りだしたとき後ろから

「あずにゃん、一緒に帰ろう」

と唯先輩が声をかけてきた。

「良いですけど……唯先輩、憂とは一緒じゃないんですか？」

私は周りをきょろきょろと見渡して、いつもテストの期間になると下校の時には唯先輩と一緒にいる憂を探した。

「あぁ憂なら、純ちゃんの家にお泊りするんだってさ。なんか、純ちゃんに勉強を教えるんだって」

「へぇ、そうなんですか。あ！　今、思いだしたんですけど、今日唯先輩の家で勉強会をするって約束してましたよね。泊まり込みで」

私は以前、唯先輩と約束していた勉強会の事を思い出した。唯先輩があまりにも勉強しないから、私が監視役として唯先輩の家に行くと約束していた。

「……あぁ、そう言えばそうだったかも。私もすっかり忘れていたよ」

お互い完全に、勉強会の事を忘れていたらしい。まぁ、無理もないか。

「今日、どうします？　私は別に構わないですけど」

「お邪魔にならないかな？　私、すぐギター弾いちゃうから」

「その時は、私が全力で止めますから。安心してください、唯先輩」

私は、にこにこと微笑みながら言った。

「あずにゃんの、いじわるぅ」

と唯先輩は、私の体にすがりながら言った。

こんなときに、自分の部屋の閉じこもっていても悪い方向へと考えてしまうだけだ。恋愛感情を抜きにしても、唯一の相談相手である唯先輩の存在は大きい。

そんな会話をしながら私と唯先輩は、唯先輩の家に向ったのであった。

帰宅（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

勉強

今私と唯先輩は、唯先輩の家で次のテストに向けて勉強していたのであった。明日は、学校が休みのためたまには泊まり込んで勉強しようと提案したのは昨日の話だった。

「あ、消しゴムが……」

机の上に置いてあった消しゴムが、机の上から転がり落ちた。

「あれ？　どこにいった？」

落ちたはずの消しゴムがどこに行ったのであった。

「どうしたのあずにゃん、見つからないの？」

唯先輩が心配そうに聞いてきた。

「はい、どこにいったの」

と私が、机の下をのぞいた時唯先輩が

「今日のあずにゃんは、ピンクのパンツ……」

「……！？　ちょっと唯先輩、どこ見てるんですか！」

と私は慌てて、立ち上がって言った。

「いやぁ、なんとなく」

と唯先輩はいやらしい顔をして言ったので、私は急いでスカートを押さえた。

「はぁ」

私は溜息をついた。

「どうしたの、あずにゃん？」

「別に何でもないです。それより勉強始めましょう」

と落ちていた消しゴムを拾って、机に向ったのであった。

「ねぇ、唯先輩」

「なに？」

「今日、唯先輩の親御さんはいないんですか？」

「うん、今日私以外の人みんな出かけているのよ」

「……つまり、今日は私と唯先輩だけっていうことですよね」

「そうだよ」
と唯先輩は、机の上に置いてあったお菓子を食べながら言う。
「ねぇ唯先輩、そろそろ夕飯の準備しましょうよ」
「そうだね、私も手伝うからさ」
「それじゃ、下に行きましょうか」
と言って私は、唯先輩と一緒に一回に降りていったのであった。

勉強（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

入浴

今日の晩御飯は、唯先輩と協力して数少ない私の得意料理のカレーをつくった。
「あずにゃん、これ結構おいしいよ。あずにゃんもちゃんとできるじゃん、見なおしたよ」
「まぁ、カレーは数少ない得意料理ですからね……」
私は食べながら思った、唯先輩は私の事をどう思っているんだろうと。性別が同性なだけに特になんともただの友人としか思っていない可能性が高い。でも、保健室でのあの唯先輩が見せた「女の子」とした表情はなんだったんだろうか。異性として、私の体に男の子のものがつていることに恥ずかしがったか。でも、そんな気はしなかった。でも、その確証もない。
「もうこんな時間か……先にシャワー浴びてきますね」
「うん、分かった」
唯先輩は、カレーを食べながら言った。私はその場から逃げるようにバスルームに向った。

「今日のところはシャワーで済ませておこう」
というのが男の私と女の私の意見だった。スカートを降ろして洗濯機の端っこに引っかけた。そして、下着も足から抜き取る。下半身が裸になった私は、洗面所の鏡に自分の姿を映した。
「……」
相変わらずにあれは、私の股のところに堂々と鎮座していた。
私は、いつも通りにシャワーを浴びているときふと妙な違和感に囚われた。肩をぐるぐると回したり、腕を太もも、手のひらでばしばしと叩いてみると、いつもの弾力はなかった。
「あれ？なんか……筋肉、硬くなってないか？」
気のせいだ、身体の硬さなんて普段から気にも留めていない。

「……私の胸、こんなサイズだったけ？」
今度は、自分の胸を揉んでみた。いつもと変わらない柔らかさ、手触りだった。そう簡単に大きさが変わるわけないか。でも
「……唯先輩、どうしよう……私もう……」
どんどん女の子から離れ行く私の身体、そして心の中までもが

入浴（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

二人「上」

私と唯先輩は、ぎくしゃくした時間を過ごし間もなく日付けが変わろうとする頃

「そろそろ、電気消しますよ？　唯先輩」

「わかった、おやすみなさい」

そう唯先輩が言った後、私は電気を消した。

「なんか疲れました……朝から、色々とあり過ぎて」

「そうだね、結局あずにゃんのあれも解決しなかったし」

「……唯先輩」

「なに？」

「狭いから、もうちょっと離れてくださいよ」

「いいんじゃん、もうこっちは場所ないし」

「やれやれ」

私は、小声でつぶやいた。いつもなら、布団を床に敷いていたのにふと気がつくと今日は、一緒の布団で寝ることになっていた。

「……全然眠れない」

私は今、性的な意味で極度の緊張に侵されていた。そして、その緊張に耐え切れず私は、かばりと布団を跳ね除けて上体を起こした。

「どうしたのあずにゃん？　寝れないの？」

「はい」

寝れない原因は、今私の横にいる人のせいで寝れなかった。いろんな意味で

「……ねぇ、唯先輩」

「なぁに、あずにゃん？」

「私、このまま男の子になっちゃうかもしれません」

「なにいってるの、あずにゃん？」

暗い中、唯先輩が一体なにを言っているんだという目をしてこちらと見つめている。そして、私はシャワーを浴びている時のことを

言った。
「あのね、さっきシャワーを浴びていた時自分の体を触ってみたんですけど、以前の私とは違う体つきになったような気がするんです」
「……体つきが？　どんな風に違うの？」
「どう言ったら分からないですけど、なんか男の子っぽくなった感じかな？」
そう言うと私は、風呂場で感じたことをそのまま唯先輩に説明した。筋肉のことや胸の事を説目した。説明していくと私は思った。もしかたら、あれが生えてきたのは変化の前ぶれだったかも知れない。下半身や頭の中を中心に、これから身体全体が男の子に近づいていくのではないのかと思った。
「と、言う訳なんです。唯先輩」
私　が説明し終えると、横になっていた唯先輩が私と同じように身体を起こした。ベットの上で座り込む格好で二人揃って座っていた。
「……さ、触ってもいいかな？」
そう言うと唯先輩は、私の返事を待たずに右手を伸ばして来た。そして、私の肩から腕までをゆっくりと擦っていく。
「どうですか、唯先輩？」
「……どうなんだろう？」
今度は、太腿が触られる。外側と内側の両方、ゆっくりとなでられて平手でやんわりとやさしく叩かれる。
「いまいち分からないけど、もし本当に変わったらえらいこっちゃだよね」
「本当、えらいこっちゃですよ……唯先輩、あとここも小さくなっているような気がするの」
そう言うと私は、自分の胸を指でさした。
「そ、そうなんだ」
唯先輩がそう言うと、恐る恐るといった様子で両手を伸ばしてさっき私が指摘した場所にそっと触れた。小さな、手のひらがパジャマ越しに膨らみを揉み解していく。

「……」

唯先輩が胸を触っている間、私は顔を真っ赤に染めていた。なんだろう、この気持ちはただの検査なのに身体を中を撫でまわされている間、変なところばかりに目が行ってしまう。外からカーテン越しに月の光が、暗闇の中で白く浮かび上がらせる。剥き出しになった肩、白い太腿そして僅かに分かるささやかな膨らみ、そんな光景が少しずつ私の理性を奪っていく、そして私は胸を触るのに夢中になっていた唯先輩を強引に抱き寄せて、唇を重ねた。

二人「上」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

二人「下」（前書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。今回の「けい☆おん」の第１５話「二人「下」」ですが一部、過激な描写がございます苦手な方はご注意ください。

製作
けい☆おん製作委員会
☆シリーズ製作プロジェクト

二人「下」

私は唯先輩の唇に自分の唇を重ね、そのまま舌を押し込んだ。突然のことだったからか、唯先輩は抵抗らしい抵抗も見せなかった。数秒間、その状態が続き、そして私はゆっくりと唇を離し

「……ご、ごめんなさい。突然、こんなことしちゃって……私、その」

と、言うと唯先輩は怒りもせずに私の身体を抱く。

「ゆ、唯先輩？」

「……大丈夫だよ、あずにゃん」

「唯先輩……」

そう私が言うと、唯先輩はゆっくりと私の身体を離し

「あずにゃん、私のこと唯先輩じゃなくて唯でいいよ」

「ゆ、唯……？」

「なあに、あずにゃん」

唯先輩は、まっすぐなまなざしで私を見つめる。

「そう言えば、今のあずにゃんって女の子に興奮する体質なんだよね」

と、聞いてくる。けど、どう答えたらいいかわからない。

「もしそうだったら、この状況は我慢ならないよね」

「……」

返す言葉もなかった。唯先輩が言った通りだった。

「あずにゃん、正直に言っていいんだよ」

私は、顔を赤く染めいつもとは違うトーンで答える。

「……はい」

「もう、最初っからそう言ったらいいの」

「すみません、こんなこと言ったら唯に嫌われると思って」

「もう、しょうがないなぁあずにゃんは……」

と、小さな声で呟いた。

「……ほら、いいよ。あずにゃん……あずにゃんの好きにしていいよ」
唯先輩は、唇を奪った私を拒絶することもなくあっさりと許可した。
「え？　いいんですか？」
「うん、いいよ。だって、あずにゃんのためだもん」
「……唯……」
そう言うと、どちらからでもなく自然に私たちは月の光が差し込む中、抱き合った。そして数分間私たちは抱き合い、ゆっくりと離した。抱き合っている間、冷静を取り戻し唯先輩と私の行動の不自然さを感じた、自分の欲求に任せてこんな状況を作ってしまったが、いくらなんでもこれはまずいんじゃないのかと思った。それにしても、本当に好きな人が相手でなければこんなことが出来るはずないのに、唯先輩はたかが同性の友人のために自分の身体を張ることが出来るのか疑問に思った。
「唯……？」
「なぁに、あずにゃん？」
「……大丈夫ですか？　無理しなくてもいいんですよ」
「大丈夫だよ、覚悟はできてるよ。それにあずにゃんが誘ったんでしょ……？」
そうじゃない、私はそんなことが言いたいんじゃない。今ここで伝えたいのは、私が唯先輩のことを本気で好きだということを伝えたいだけで、今知りたいのは唯先輩が私の事をどう思っているかという事だ。ここまで来て、唯先輩に「好き」とも言えずに「好き？」とも聞けなかった。でもそれでもよかった、今目の前にやる気満々の唯先輩がいる。もう、我慢できなかった。私はずっとこれを待っていた、神様だが未知の現象化は知らないが少しだけ、その者たちに私は感謝した。
「はぁ……はぁ……どうかな唯……気持ちいい？」

唯先輩は、私の身体の上で馬乗りになる格好で息を切らしながら「気持ちいいよ……あずにゃん……もっと、もっとやっていいよ……」

ベットの上で激しい行為に耐え、必死に唯先輩は私の体にしがみついていた。唯先輩の女の子した柔らかな身体に触れるのがたまらなく興奮する。女の子の身では決してたどり着けない、女の子相手には味わえない性の快感。今だからこそ、同性では許されない行為を実現でき大好きな女の子と一つになれる。初めて唯先輩のパートナーとして認められたような気がした。今だけは、例のあれの姿も気にならなかったもう恐怖心はなかった。私たち二人は、時間が許す限りお互いの愛を確かめ合った。

二人「下」（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

告白

私は、眠たいまぶたを開けて目を覚ました。目が覚めると私は、昨日の記憶をたどった。昨日は、空が明るくなるまでベットの上で唯先輩とあんなことやこんなことをしていたというとこまでは覚えているがそこから先は覚えていない。そして、目が覚めて私は普段とは違う、奇妙な違和感を覚えつつ周りを見わたす。外を見てみると、夕方の光に近い日差しが窓からさしていた。窓を見た後、私のすぐ隣にいた唯先輩を見た。

「……」

唯先輩は、私の腕に包まれるように眠っていた。そして、私の下半身の辺りの湿った感覚。

「うわ、シーツべたべたじゃん」

頑張り過ぎたせいかは分からないが、シーツには多種多様な液体が豪快に撒き散らしていたらしい。けれど、違和感はそれだけではなかった。

「あれ？」

と、思わず呟いてしまう。

「なくなってる」

昨日まで私の股のところにあったあれが、急になくなっていたのであった。触らなくても、昨日あれだけ散々な目に遭っていたから気付かないはずがない。

「ん……」

唯先輩が目を覚ます。

「おはようございます、唯先輩」

「……おはよ、あずにゃん」

至近距離で見つめ合う私たち、そしてお互い昨日の事を思い出したのか揃って顔を赤くする。なぜなら、お互い睡眠をとるにはふさわしくない格好でいた。

「ねぇ、今って何時くらい？」
「夕方の４時くらいになるですよ」
「そうなんだ……」
「はい……」
お互い会話が続かない、さすがに今何を話したらいいかお互い分からなかった。
「あずにゃん、私喉が渇いた」
と、言うと唯先輩は布団を跳ね除け上体を起こそうとすると
「あれ……身体が動かない」
「どうしたんですか、唯先輩？」
「身体中が痛すぎる、特にここが」
と、唯先輩は特に痛いところを指をさす。
「ごめんなさい、強く押しちゃいましたか」
そう私が言うと、唯先輩は首を横に振りながら
「ううん、大丈夫。気にしなくてもいいよ」
唯先輩が言った後、私は床に落ちていたシャツに腕を通して私はベットから立ち上がり
「お茶入れてきますから、ちょっと待っててください」
「うん、分かった」
と、唯先輩が言った後私は一階に降りて行き飲み物を取りに行った。

「消えたの？　あれ」
お茶を飲みながら、私は遠回りせずに結論から伝えた。さすがの唯先輩もこの報告には驚いていたようだ。
「消えたって……いつ？」
「唯先輩より数分前に起きた時には、もうなくなっていたんです」
と、唯先輩の質問に答える。そして、実際に見てみるとそこには、普段見慣れている女性器がつているだけで、あれはきれいさっぱり消えていた。

「……」
唯先輩は口をポカンと開けて、表情を固める。そして、数秒後
「……よかったね。あずにゃん」
と、言った。
「唯先輩、その一言でこの怪奇現象を片付けるきですか？」
「うん」
唯先輩は、素直に言った。
「唯先輩、さすがにフィクションじゃないしそれで終わりってのはどうなんですか？　何の説明もなく、突然生えてきた突然消えたのよ、おかしいじゃないですか」
とにかく、あれは非現実すぎる結末だった。
「まぁ、まぁ。結果が良ければいいってやつかな？　私も身体を張った甲斐があったよ、それにお互いいい思いが出来たんじゃない？」
「え？」
「ほら、昨日あんなに激しくしちゃってさ。よっぽど良かったんだね、あれ」
そう言って唯先輩は、笑いながら私が入れてきたお茶を飲んだ。
「……」
もしも、私が女の子のままだったら、唯先輩はここまで私の事を求めてくれただろうか。あんなにおかしな姿になった私に、簡単に身体を差し出したりするなんて……
「どうしたのあずにゃん？　そんなに浮かばない顔をして、あんまり嬉しくなかった？」
「いや別に、そういうわけじゃないけど、なんというか」
「ん？」
唯先輩が私の顔を見つめた。
「唯先輩、私に抱かれる時とてもいい表情をしてた。いつもの私には、女の子の私にはそんな顔は絶対に見せてくれないのに……」
本当は、唯先輩に「好き」って言いたいのに、今こそ言わなければいけないのに。

「あ、あずにゃん？」
「どうせ、唯先輩を抱いたのは女の子の私じゃないんです。いっそ私なんて、このまま男の体になっちゃえば良かったんです。そうしたら、唯先輩とずっと一緒に居られたかもしてないの……」
「好き」という言葉が出ず、ただ八つ当たりの言葉しか出なかった。どうして、私は怒っているんだろう、どうしてこんなにも泣きそうになっているんだろう。
「性別に、こだわり過ぎだよ。あずにゃん」
唯先輩は、穏やかな笑みを浮かべて言った。
「ねぇ、どうして私があずにゃんに抱かれたか分かる？　私だって、あずにゃんのことが好きなんだからね。友人じゃなくて、一人の女の子として」
「ぇ？」
唯先輩はゆっくりと私の背中に手を回し、私の胸に顔を埋めた。突然の唯先輩からの告白と予期せぬこなたの行動に私は頭が追いついていかなった。私が動揺していると唯先輩は、私の人差し指をちゅうちょせずに自分の大事な場所へと押し込んだ。さっきまで私のあれが、出入りしていた場所に
「ちょっ、何やっているんですか！」
「い！……」
唯先輩が痛そうに吐息を洩らす。それもそのはずだ、さっき立てないほど痛がっていたんだから。
「あれ？」
一番奥まで指が届く。そこには、本来あるはずのものがどこにもない。これを突き破ったのは、私自身だ自分の意思による結果だった。
「あずにゃんが、男の子じゃなくったとしても私が抱かれた事実は残ってるよ。あずにゃんが私の事を愛してくれた証はここにあるんだよ。それに、せっかくなら初めて体験するなら好きな相手でいいんじゃん。大丈夫、私だって軽い気持ちであずにゃんに抱かれたわ

けじゃないんだから」
「唯先輩」
さっきまで我慢していた涙を思いっきり泣き、唯先輩に抱きついた。元の女の子の身体に戻ってしまったけれど、好きな女の子と一つなったという証は唯先輩自信の身体に刻まれている。
「ごめんね。なかなか言い出す勇気がなかったというか。ほら、私が「好きだ」って言ってもあずにゃんは遊び半分でしか受け取られないかも知れなし」
そう言いながら唯先輩は、正直に私に告白する。
「謝らなくてもいいですよ。その、私だってさ……」
でもやっぱり、素直になれなかった。
「まぁ、あれですよ。私も似たようなもんなんです。気持は。別に唯先輩がそう言うのなら、このままずっと唯先輩と一緒に居てあげるってのもいいですよ」
「さすがあずにゃ。相変わらずに、素直じゃないなぁ」
「うるさいですよ。何かあったらちゃんと責任は取ってあげますから感謝してくださいよ」
と、言うとお互い再び何も言わずベットの中に潜り込み、素肌で抱き合った。ずっとこの気持ちを忘れないように

告白（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。次回の１７話で最終回になります。次回の投稿は、来週の土曜日になります。

けい☆おん

あれから数日後、私は唯先輩を部室に呼び出していた。唯先輩の目の前には、女の子の身体を取り戻した私がいる。そして、私の目の前にはこの数日間私の身に起きた奇想天外なシナリオを唯一知っている唯先輩がいる。最初は、唯先輩に相談したことを後悔していたが結果的に悪くないエンディングを迎えることが出来た。

「唯先輩、本当に私なんかでいいんですか？」

と、私は恥ずかしながら唯先輩に聞く。

「うん。なあに、あずにゃんは私じゃあダメのなの？」

唯先輩が、ニヤケタ顔をして言う。そんな顔をした唯先輩を見ていると、私もやっと普通の日常を取り戻したんだなと安心してしまう。

「いや、そうじゃないんですけど。女の子が女の子を好きになるっていうのは、なんか、あれじゃないですか？　まだ世間から、受け入れられるものでもないし、今でも唯先輩が私のことを好きって言ってくれたのが信じられないです」

私はそう言うと、唯先輩は真剣な顔をして

「それはこっちだって一緒だよ。まさか、こんな私を受け入れてくれるなんて思わなかったから……ねえあずにゃん、私たちいつまで経っても一緒だよね？」

唯先輩が、珍しく顔を赤くして言う。

「一緒ですよ唯先輩。たとえ、世間が認めなくてもいつまでも一緒です」

「そうだよね、あずにゃんと一緒ならどんな障害でも乗り越えられる……そんな気がするよ」

「うん、これからもよろしくお願いします。唯先輩」

「……うん、あずにゃん……あのさ」

唯先輩が、顔を下に向けて言う。

「どうしたんですか？」
「なんていうか、私たちってこういう真面目な感じって似合わないよね」
「そうですね。普段、こんな風に真面目に話すことってないですもんね」
私は、即答で答えた。普段からこんなに真面目に話した事がないから何か変な感じがする。でも、たまにはこういうのもいいかもしれない、唯先輩の意外な一面も見ることが出来たそして私は女の子としてちょっとだけそのことに自信が持てた気がする。そう思った私は、ちょっとだけ調子に乗ってみることにした。
「……あのう、唯先輩。ちょっと顔を上げて」
私がそう言うと、唯先輩はゆっくりと顔を上げ私の顔を見た。そして……私は自分の唇を唯先輩の唇に重ねた。

出演
中野　梓
平沢　唯
平沢　憂
鈴木　純
秋山　澪

演　出・シナリオ編集
柊こなた

原　作

けいおん！

原作協力

かが☆こな

（作者にしすけ）

２０１１年５月７日

けい☆おん製作委員会

☆シリーズ製作プロジェクト

けい☆おん（後書き）

こんにちは、柊こなた（坂田銀時）です。今回の１７話をもちまして最終回とさせていただきます。長い間ご覧いただき本当にありがとうございました。

想い

私は生まれて初めて恋をした。相手は私の幼馴染で、小学校から今までずっと過ごした。そして、同じ高校に入学し同じ軽音部に入部した。元々相手も音楽が好きで、私もその影響を受けて音楽を始めた。そして、軽音部に入ったおかげで新しい友達もできた。合宿へ行ったり学園祭で演奏したりといろいろ楽しい思い出もできた。だけど、心の奥では楽しんではいなかった。本当は楽しいだけれども何かを失ったように思えた。まるで、周りの人が私からその相手を人を奪っているように感じた。

その時、私は気付いた。私が、あの人のことを好きになっていることに。

よく考えてみたら、いつも私の頭の中ではその子の顔が浮かんでいた、授業を受けているときやお風呂に入っているとき、ご飯を食べているときなど何をしていてもいつもその子を思ってしまう。そしていつしか、その子に自分の気持ちを伝えたいという想いが芽生えた。今すぐにも、自分の想いを伝えたいと思った。だけど、その想いは伝えらない。なぜなら、そこにたどり着くまでには絶対に乗り越えられないものすごい大きな壁があるのであった。それは、その子が私と同じ女の子だった。そう、私は同性に恋してしまった。

「どうして自分は、男じゃなくて女の子として生まれて来たんだろう」

ついこんなことを思ってしまう。どうして自分は男の子として生まれて来なかったんだろうと。そんなことを考えて、神様がひょっこりと私の前に現れて自分を男の子に変えてくれるだろうという非現実的なことを思っていた。でも、まさかそんな非現実的なことが本当に起きるとは……。

それは突然のことだった。

「なんじゃこりゃぁーーーーー！！」
私は、眠りから目が覚めて数秒で奇声を上げた。
「どうしたの澪、そんな大声出して」
お母さんが、私の部屋のドアの前に来て私に聞いてきた。
「い、いや何でもないよ、お母さん」
「本当に？ちょっと入るわよ」
と、言うとお母さんはドアノブに手をかけドアを開けようとした。
「本当になにもないから。お母さん、さっきお父さんが呼んでいたよ」
私は、とっさに嘘をついた。
「本当？一体何かしら」
と、言ってお母さんはドアの所からはな一階に降りていった。
「……危なかった」
なんとか、お母さんを追い払った。まさか、こんなことになっている自分の姿を見せてはいけなかった。
私は、自分の目を疑った。今、自分の股のところが膨らんでいたのであった。
「ま、まさかね。これは夢よ。もう一回寝たら覚めるわきっと」
そう自分に言い聞かせながら、私はもう一回ベットに横になり寝た。だが、再び起きても股のところは膨らんでいた。
「う、うそでしょう……ぁ！きっとなにかが入っていて膨らんでいるのよ」
そう思いながら私は、パジャマと下着を一緒にごそっと降ろしてみた。
「……そ、そんな、そんなことが」
私は泡を吹いて気絶しそうだった。股のところには本来なら女の子には絶対に存在しないものが、最初からあったような存在感を出しながらちょこんとついていた。
「どうして、そんなものが……」
もう私は言葉を失った。今、自分の身に起きていることに。突然、

眠りから目覚めたら自分の股のところに本来なら女の子には絶対につかないものがそこに着いているのだ。未だに状況が飲み込めずに、口を大きくポカンと開けて立っていると

「澪、そろそろご飯食べないと学校に遅刻するわよ」

とお母さんが言ってきた。その声のおかげで、私は正気に戻った。

「うん、分かった。すぐ行く」

降ろした下着を再び履き、パジャマを脱ぎ制服に着替えてカバンと楽器が入ったケースを持って一階に降りていき、朝食を食べて学校に行ったのであった。

想い（後書き）

こんにちは、柊こなたです。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7133s/

けい☆おん

2012年1月14日13時47分発行